
女神の泉

夏梅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

女神の泉

【Nコード】

N4127R

【作者名】

夏梅

【あらすじ】

過去の記憶を失った妖精のティナと、少年剣士であるイークはワルンゼルの町にある『総合ギルド』で生計を立てていた。だが、ある出来事をきっかけにティナは記憶を徐々に取り戻していく……。気の強い妖精の女の子と剣の腕はいいのに情けない性格の少年が、魔物退治やら人助けやらをしながらまったりと依頼をこなしていく物語。

プロローグ

暗く、不気味な森の中。昼間だというのに、その森は常に薄暗く、よどんだ空気が漂っていた。そんな中、まるで樹海のように濃い霧で覆われている道なき道を、一人の少女が走っていた。

少女は地味な茶色のローブを身にまとい、フードを深くかぶって顔を隠していた。ローブの裾からは、元は美しかったであろう薄青のドレスが見えている。だが、そのドレスもローブも所々が破れ、血にまみれて汚れてしまっていた。霧のせいで、辺りの様子が分からず何回も転んでしまったためだ。

痛い……。少女は齒を食いしばりながら思った。背中を矢で射られたときの傷がいつの間にか開いてしまったようだ。血がじわじわとにじみ出てくるのが分かる。今、走っていられるのが不思議なくらいの血の量だった。

「もう少し……もう少しよ……」

少女は自分を励ますように、小さくつぶやいた。血を多く失ったせいか、頭がぼんやりとしてくる。足もふらついており、普段のように軽やかに走れない。気をしっかり保とうと、頭を振ってみるがあまり効果はなかった。

少女は自分でもどこを目指しているかよく分からないまま、何かに導かれるように走り続けた。

どれぐらいの時間が経ったのだろう。すでに、濃い霧のせいで方向感覚も時間の感覚も失っていた。

少女は不安を覚え始めていた。無我夢中でこの森に入ったのはいが、目的の場所に着くとは思えなくなってきた。もし、ただの伝説だったのなら自分はこのまま……。嫌な想像が頭をよぎる。それを振り払うかのように、また頭を軽く振る。

突然、視界が開けた。少女はとうとう『それ』を見つけた。まさ

かと思いながら、もはやすっかりしているとは言えない足取りで、その場所に近づく。

そこには、透き通った水を淵まで湛えた泉があった。その周りだけ霧が晴れており、仄かに光を放っている所から、普通の泉でないことが窺える。夢かもしれないと思い、泉に指を浸してみると確かに冷たさが伝わってきた。かがんだせいで背中に激痛が走り、少女はくつと苦痛の声を漏らした。紛れもなく、これは現実だろう。

「女神様——」

少女は泉の前に跪くとフードを取り、祈るように手を握り締めた。柔らかな金髪が泉の光に照らされ、黄金のような光を放った。そのまま翡翠色の瞳をそっと閉じる。

しばしの後、少女の唇からゆっくりと歌がつむぎだされた。少女にとつては、とても大切で、とても懐かしい歌——。

静寂に満ちた物悲しい森の中を、澄んだ声が響き渡る。霧をまとった重い空気を切り裂くような、清らかな声だった。瞳を閉じていた少女は気が付かなかったが、確かにその時、歌と合わせるように泉の表面に静かに波紋が次から次へと生まれ始めていた。

だが、少女の歌声は徐々にか細くなっていき、とうとう途切れてしまった。辛うじて繋ぎとめていた意識がだんだん遠くなっていくのが分かる。華奢な体が、糸が切れたように傾いた。

意識を完全に手放す直前、少女は鈴の音を聞いたような気がした。暗く、不気味な森の中。霧の覆われたそこに、ひっそりと静寂が戻ってきた。

第1話 朝の訪れ

スフェア王国の北西に位置する町、ワルンゼル。武器や防具の製造が盛んなこの町には、『総合ギルド』というものが存在する。

普通、他の町ではギルドというものはそれぞれの職業により分かれていたものである。例えば、『魔術師ギルド』や『冒険者ギルド』、『戦士ギルド』など。だが、ワルンゼルはギルドが一つしかないため、どんな職業の者が加入しても良い決まりになっている。これにより、違うギルド同士の者がチームを組むということをしなくても、同じギルドの仲間とチームが作れるようになったのだ。

二つ目に違うのは、ギルドの仕組みである。チームを作って任務をこなすのが当たり前の世の中だが、なんとこの総合ギルドではある程度までの人数なら、何人でも良いことになっていた。一人や二人で任務に、ということもざらではない。

実際、この町のはずれで生活する少年と妖精も、その中の一人だった――。

+++

世界に朝が訪れた。植物に付いた朝露が朝日に反射し、まるで世界中に宝石をちりばめたように美しくきらめいている。朝靄が立ち込める中、あらゆる生物たちも目を覚まし、各々の活動を始めていた。太陽はその姿をじわじわと現しながら、それらの様子を見守っていた。

ワルンゼルの中心にある教会の鐘も、太陽が昇ってくるのと同時に鳴り始めた。力強い音は、朝が来たことを人々に告げ、眠りから覚まさせる。その音はいつも町のはずれにまで鳴り響いてきていた。少女は、寝室の固いベッドの一角で目を覚ました。朝日が窓から入り込み、真っ白な光に包まれた少女を更に眩しく見せていた。ぼ

んやりとしたまま体を起こし、透明がかった今にも破れそうなほど薄くて細い羽をふわりと広げる。そのまま浮き上がると、壁際に置かれた鏡のところまで飛んだ。

いつものように、鏡に映った自分の姿をチェックする。金髪がもつれていたで、少女は手ぐしで整えた。髪が細いせいかな、よくこつやってもつれてしまうのだ。櫛が欲しいと常々思うが、少女のサイズに合う櫛はどこにもないだろう。誰かが作ってくれるのなら別かもしれないが・・・。

鏡の中の自分を改めて見つめると、金色の睫に彩られた淡い翠の瞳が見つめ返してきた。常に光に包まれているため薄く見えるが、本当はもつと濃い色なのだろう。

服は皺一つない、腰がきゅつと締まった薄桃色の膝丈ワンピースだ。胸元には紋章が彫られた金のボタンがいくつかわめられている。不思議なことに体が汚れたことはないの、服を替えたことは一度もない。もつとも、この服以外着られるものなどないのだが。

少女はいつもどおり完璧な姿に満足げに頷く。気分が良くなりくると宙で一回転すると、貴重なガラスのはまった窓から外を覗いた。すでに太陽は昇っており、辺りは明るい光に満ちている。この家は町はずれにあるが、人々の活気に満ちた声は十分届いてきた。

少女はふと振り返り、真下を見下ろした。そこでは、先ほどまで同じベッドで眠っており、大半のスペースを占領していた少年が幸せそうな寝息を立てて眠りこけていた。その姿に思わずため息が漏れる。

少女は呆れたといわんばかりに腰に手を当て、顔の傍まで飛んでいくと、大きく息を吸い込んだ。

「起きなさーい！！！」

少年は身じろぎ一つしない。黒い短髪を色んな方向にくるくるはねたさせたまま、相変わらず穏やかな顔で寝入っている。こんな事

には慣れているはずだが、思わずまたため息を吐いてしまう。こんなもので起きたためしはない。ここで起きれば今日は槍が降ってくるだろう。

今度は頬を思い切り引つ張りながら叫んでみる。だが、眉をしかめただけで反応は皆無に等しかった。むっとした少女は、鼻を容赦なく蹴り飛ばし、耳元で騒ぎ立てる。

「寝ぼすけ！馬鹿っ！起きろ！」

ようやく、少年は手をのろのろと上げた。やっと起きるか、と手を止めた少女だが、見事に期待は裏切られた。虫を追い払うかのように、手で振り払われてしまったのだ。不意をつかれた少女は床の上に飛ばされかけたが、すんでのところまで羽を動かし、ふわりと浮き上がる。

一気に不機嫌になった少女はしかめっ面になり、何か思案するように黙り込んだ。そのうち、ある方法を思いつき、ぱっと顔を輝かせる。寝起きの悪い少年でも一発で目覚めそうな方法だ。

悪戯っぽく笑ってから、口の中でそつと呪文を紡ぐ。少女の足元に光を放つ五芒星で描かれた魔法陣が浮かんた。最後に、その属性の魔法を司る大精霊の名を唱える。

次の瞬間、鼓膜を破りそうなほどの轟音が部屋中に鳴り響いた。

「！？」

少年が声にならない叫びを上げながら慌てて飛び起きた。少女はそれを見て笑い転げると、目の端の涙を拭きつつ少年の顔を覗き込む。少年は何が起ったのかさっぱり分らないという顔で、目の前の妖精の顔を口をパクパクさせながら見つめていた。少女は笑いを必死にこらえつつも、にっこりと優雅に微笑みかける。

「おはよう、イーク」

「お、おはよう・・・ティナ・・・？」

その間抜けとしか言いようのない顔を見て、少女——もとい妖精は笑いをこらえきれずにまた吹き出してしまった。

第1話 朝の訪れ（後書き）

魔法っていいですね。RPG大好きです。

第2話 いざ、出発

イークはまだきんきんと鳴る耳を押さえて、身支度を整えていた。その瞳は肩のそばで機嫌よさそうにふわふわと舞う妖精に恨めしげに注がれている。ティナはそんな視線を無視し、イークの準備が終わるのを待っていた。

「ティナ・・・いくらなんでも朝から魔法でたたき起こすのはどうかと思うよ」

「幻影魔法だったからいいじゃない。本当の魔法だったら死んでたわよ」

「そうだけどさ・・・」

イークは納得いかない、と言いたげな顔で口を尖らす。だが、心のどこかで感心している自分がいることに気づいていた。

魔力というものは元々一部の人間しか持たないものだ。そのため、魔術師はほんの一握りしか存在しない。その上、人間の魔力には限りがあった。一定の魔力を使えば精神力も体力も削られていき、最悪の場合『死』に至ると聞く。魔力が持たない者がイメージするように、簡単に使えるものでも、いくらでも使える便利なものでもないのだ。

だが、目の前の妖精——他の幻獣たちも——はどうやら魔力の限界というものを知らないようだった。実際、ティナも先ほどのように簡単にぼんぼん魔法を使っている。人間がはるか昔から幻獣たちを敬ってきた理由は、もしかしたらそこにあるのかもしれない。

考え事にふけていて自分でも気づかないうちにぼんやりとしていたイークに、すぐさまティナの叱責が飛んできた。

「イーク！手が止まってるってば。お腹すいたんだから早くしてよ」

「あ、ごめん」

イークは条件反射のように謝り、慌てて身支度を終える。なぜか出会った時からティナのいうことには逆らえないのだ。なぜだろうと首を傾げつつ、少年は立ち上がった。

+++

朝食を済ませた二人はギルドへ行くための準備を始めた。イークは身軽な鎧を着て、愛用のサーベルを腰の革製の鞘に納めた。ティナはイークが装備し終えたことを確認し、日課になっている強化魔法を唱える。鎧は一瞬淡い水色の光を放ち、すぐに元のくすんだ鉄色へと戻った。この魔法は盾いらずの優れものである。なるべく軽装でいたいイークにはぴったりの魔法だった。それを終えて、最後に日持ちする食べ物や何かと便利な道具の入った袋を腰に縛り付けておく。これで、準備は完璧だった。

二人は装備も持ち物もしっかり持ったことを確認すると、ようやく外へ足を踏み出した。

朝の町には人々の活気があふれていた。この町はスフェア王国中から人が集まるため、人々の出入りはかなり激しい。だが、いくら色んな髪や瞳の色をした人間が多いといっても、幻獣——それも妖精はかなり目立つのだ。過去に見つかって捕まえられそうになった経験もある。そんなわけで、ティナはいつもイークの持つ持ち物の入った袋に入り込んで隠れていた。

大通りの途中にある市場を通り過ぎ、端の店の角を曲がってまっすぐ行くと裏通りに入る。裏通りに入ってすぐ右を曲がれば、もう総合ギルドにたどり着く。——この道のりは一口で言えるが、ワルンゼルの町の広さを考えれば中々距離は遠いのだ。

イークは道中、親しい人と挨拶やら会話やらをしながらギルドに

向かっていった。ちなみに、この人当たりのよい少年が剣士としてギルドの依頼をこなしているのは周知の事実だった。そのため、知人や友人に依頼されることも少なくなかった。

+++

結構な時間をかけ、イークはようやくギルドの前にたどり着いた。一見すれば品のよいバーにも見えるが、実は王国一の強者揃いという評判を誇るギルドであり、スフェア王国でこのギルドを知らない者はいないと言われるほどの実績がある。ここは腕に自信のある者やある種の才能を持った者しか集まらないことでも有名であった。イークは頑丈な木の扉を押して、中に入った。扉に付けられたベルがからんころんと軽快な音を立てる。二人はそのまま正面の受付へと向かった。

「おや、イーク・・・とティナ。今日もずいぶん遅かったね」

受付にいた恰幅の良い中年の女性が、呆れたように声を掛けてきた。イークが少しばつの悪そうに頭をかく。ティナは袋から姿を現すと、女性の側まで飛んでいった。

「あいかわらず、誰かさんのせいで出てくるのが遅くなっちゃうのよ。——まだ依頼残ってる？アルデさん」

「あいにく初級者向けのしか残ってないねえ。他の奴らがさっさといいのを持ってちゃってさ」

アルデがぱらぱらと依頼リストをめくりながら眉をしかめた。ティナもその紙を覗き込んでみると、確かに二人には簡単なものばかりだった。

ティナがあんたのせいよといわんばかりに、後ろにいたイークを

睨みつけた。思わずイークはたじろいだ。ちょうどその時、誰かがギルドの中に入ってきた。

「おい、アルデ。ちょっと頼みたい依頼があるんだが」

「あんたが依頼？珍しいね、タウロ」

タウロはアルデと同年代の男で、近所で金細工店を営んでいる。二人は昔馴染みらしく、会うたびに話し込むほど親しかった。そして、ティナのことを知る数少ない人間の一人でもある。

タウロは受付にやってくると、イークとティナにも声を掛けてきた。

「よつ。今日も依頼を受けにきたのか？」

「そうです。あ、でも、簡単な依頼しか残ってなくて・・・」

少し恥ずかしげにイークが答える。ティナの視線が痛い。すると、タウロは笑顔でぼんぼんとイークの肩を叩いてきた。

「だったらちようどいい。俺の依頼、受けてくれないか？」

「へ？」

「それ、難しい依頼なの？」

驚いて口を開けている少年を無視し、ティナが尋ねた。タウロは多分な、と肩をすくめるとアルデに向き直った。

「おい、そのリストに加えておいてくれよ。内容の方だけだよ、鉱山の途中の山道で魔物が出沒して、こっちに材料が来なくなっただ。これ以上そんなことが続くと、生活できなくなっちゃう。その魔物って言うのがけっこう強いらしくって、もう何人がやられてるみたいだ。・・・お二人さんなら大丈夫だと思うが、どうだ？」

タウロに聞かれ、二人はしばし顔を見合わせた。お互い考えていることは同じだろう。そうとなれば、返事は決まっている。すぐにティナがにっこりと笑って言った。

「もちろん大丈夫！その依頼、受けるわ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4127r/>

女神の泉

2011年10月8日12時21分発行